■原著論文

看護過程演習における演習用電子カルテ活用時の社会人基礎力の変化と学習効果

北島 洋子* 丸上 輝剛** 瀬山 由美子*** 中馬 成子*

Changes in fundamental competencies for working persons and the learning effect when using practice electronic nursing record systems in nursing process training

Yoko KITAJIMA* Terutaka MRUKAMI**
Yumiko SEYAMA*** Nariko CYUMAN*

*奈良学園大学保健医療学部（〒631-8524 奈良県奈良市登美ヶ丘 3 丁目 15-1)
*Faculty of Health Sciences, Naragakuen University. (3-15-1 Tomigaoka, Nara City, Nara Prefecture, 631-8524, JAPAN)
**和洋女子大学看護学部（〒272-8533 千葉県川市国府台 2-3-1)
** Wayo Women's University. (2-3-1, Kokufudai, Ichikawa-shi, Chiba, 272-8533, JAPAN)
***宝塚大学看護学部(〒530-0012 大阪府大阪市北区芝田 1-13-16）
***Takarazuka University. (1-13-16, Shibata, Kitaku, Osaka-shi, Osaka, 530-0012, JAPAN)

要旨

【目的】演習用電子カルテを使用した看護過程演習における，学生の社会人基礎力の変化とグループワークの活用による影響および看護過程の学習効果について検討する。

【方法】対象：看護系大学 2 年次配当科目の看護過程演習受講生 79 名。調査方法：無記名自記式質問紙調査。看護過程演習全 15 回のうち看護過程の情報収集終了時と看護過程の全講義終了時に調査した。調査内容：社会人基礎力尺度 36 項目，主体的な学修態度尺度 5 件法 9 項目，自作の電子カルテ操作の理解 10 項目，自作の看護過程の理解 24 項目。分析方法：SPSS Ver.25 for Windows を使用し記述統計量，有意差検定，相関係数を算出した。

【倫理的配慮】対象者に看護過程演習の講義初回に研究目的と方法，協力への自由意志は尊守され，個人情報は保護されることを文書と口頭で説明し，調査票の回収をもって調査に同意を得たと判断した。調査実施にあたっては所属大学の倫理審査委員会の承認を得た。

【結果】第 1 回調査の回収数は 25 名，回収率 30.8%，第 2 回調査の回収数は 20 名，回収率 24.7%，そのうち第 1 回調査と第 2 回調査の照合が可能であった 12 名を分析対象とした。社会人基礎力は第 1 回調査と第 2 回調査の間に有意差があることが示された。また社会人基礎力は看護過程の理解との間に有意な正の相関を認めた。

【考察】看護過程演習の前後比較において社会人基礎力が伸長されることが明らかとなった。また，社会人基礎力を伸長させることにより看護過程の理解も促進されることが推察された。

キーワード ： 社会人基礎力，看護過程演習，演習用電子カルテ

1. はじめに

社会人基礎力は職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力 [1]であり，下位概念の action，thinking，teamwork の 3 分類から構成される。近年の若者は少子化や核家族化などの影響により，従来なら生育過程において身につけることが可能であったはずの能力を十分に獲得できずに育ち，コミュニケーション能力や社会人として必要なスキルが不十分なまま大学に進学し，社会へと出ていく傾向にある。看護系の大学に入学する学生にも同様の特徴がみられることから，就職しても学生から看護師へのトランジションがスムーズにいかないことが懸念されており，社会人基礎力は看護専門職においても育んでいくことが必要な能力とされている [2]。

看護系大学生を対象とした調査によると，社会人基礎力はグループワークやディスカッションなどの相互作用的な学習活動により伸長する [3]ことが明らかとされている。看護基礎教育における看護過程の授業形態は，学生が初学者であることを考慮し，最初は個人による看護過程の展開は実施せず，グループワークを活用し，他学生との学び合い，教え合いのなかで問題解決型の思考プロセスを踏んで学習することが多い。グループのメンバー同士で知恵を出

し合いながら一つの事例を展開していくことにより，個人で取り組むよりも学習効果が高まることが期待され，グループによる活動は社会人基礎力の伸長にも効果的であると推察される。

電子カルテは多くの実習病院で普及し，実習では学生も電子カルテを開き情報収集を行う。しかし学生は情報を収集する以前に，電子カルテの操作の習熟に時間を要することがある。臨地へ出向く前に電子カルテの操作に習熟していれば実習時間を効果的に活用し学習の遅滞を招くことも少なくなるのではないかと考え，グループワークを活用した看護過程演習において演習用電子カルテ [4]を導入した。電子カルテ操作の習熟においても，学生間の相互作用的な学習活動が発生し，他者と協力して目標を達成する能力やコミュニケーション能力の向上にも効果的であると考えられる。

2. 目的

本研究の目的は，演習用電子カルテ 4)を使用した看護過程演習における，社会人基礎力の変化とグループワークの活用による影響，看護過程の学習効果について検討することである。

3. 方法

3.1 調査対象と調査期間

本調査の対象は，看護系大学 2 年次配当科目の看護過程演習(1 単位 30 時間)を受講する学生 79 名であった。調査期間は平成 29 年 4 月から 7 月であった。

3.2 調査方法

看護過程演習の授業方法は，看護過程の内容や方法について看護過程のステップごとに教員が講義を実施し，学生が当該ステップの個人課題に取り組んだあと，個人課題を持ち寄りグループ学習において課題内容を共有する形式であった。1 グループは 5～6 名の学生から構成され，演習用電子カルテ [4]を用いて 1 事例の患者についての情報を収集し，看護過程を展開した。教員は 2～3 グループを担当し，グループの進捗状況に応じて，電子カルテの操作方法や看護過程の展開方法についてアドバイスするなどの対応を行った。

調査方法は，無記名自記式の質問紙調査を実施した。看護過程演習全 15 回のうち看護過程の情報収集終了時に第 1 回調査を実施し，全講義終了時に第 2 回調査を実施した。第 1 回調査，第 2 回調査ともに，講義時間の終了間際に一斉に学生に対して調査票を配布し，回収は大学内のプライバシーの保護される場所に設置されたポストへ投函する留置式とした。

調査内容は，社会人基礎力尺度 [3]6 段階リッカートスケール 36 項目，主体的な学修態度として畑野 [5]の授業プロセス・パフォーマンス尺度の 5 件法 9 項目，自作の電子カルテ操作の理解 5 件法 10 項目，自作の看護過程の理解 5 件法 24 項目(第 1 回調査は情報収集 12 項目，第 2 回調査は分析～看護計画 12 項目)であった。

3.3 倫理的配慮

対象者に看護過程演習の講義初回に研究目的と方法，調査協力へは自由意志が尊守され不参加でも不利益を被らないこと，プライバシーが保護されることを文書と口頭により説明した。調査票配布は第 1 回調査，第 2 回調査ともに，学生の学習する権利を侵害しないよう授業の終盤に講義内容がすべて終了した後，学生に一斉配布した。調査票への記入は個人の自由意思に委ね，調査票の回収は大学内のプライバシーが保護される位置に設置された回収箱への投函とし，調査票の回収をもって調査への同意を得たと判断した。本調査は所属大学の倫理審査委員会の承認を得て実施した。

3.4 分析方法

統計分析は SPSS Ver.25 を使用し，記述統計量，Wilcoxon 符号付順位検定，Spearman の相関係数を算出した。

4. 結果

第 1 回調査の回収数は 25 名，回収率 31.6%であった。第 2 回調査の回収数は 20 名，回収率 25.3%であった。そのうち第 1 回調査と第 2 回調査の照合が可能であった 12 名を分析対象とした。対象者は女性 11 名，男性 1 名であり，准看護師経験は全員なく，社会人経験もなかった。記述統計量は表 1 のとおりである。

Wilcoxon の符号付き順位検定により，「社会人基礎力」は第 1 回調査中央値 135.5 と第 2 回調査中央値 154.0 の間に有意差があることが示された。「社会人基礎力」の 3 分類レベルの比較においても，第 1 回調査よりも第 2 回調査の回答のほうが高値を示していたが，有意差を認めたのは thinking のみであった。「主体的な学修態度」と「電子カルテ操作の理解」については，第 1 回と第 2 回の間に有意差を認めなかった(表 2)。

Spearman の相関係数を算出し，「社会人基礎力」と「看護過程の理解」は第 1 回調査と第 2 回調査ともに有意な正の相関を認めた。第 1 回調査，第 2 回調査ともに「社会人基礎力」は「主体的な学修態度」および「電子カルテの操作」との間に相関関係を認めなかった(表 3)。

5. 考察

社会人基礎力の合計得点の中央値は先行研究において 1 年次生と 4 年次生 142[3]，4 年次生 145[6]であり，本研究においては 2 年次生を対象として第 1 回調査が 135.5，第 2

表１　記述統計量

		主体的な学修態度	電子カルテの操作	看護過程の理解	社会人基礎力	action	thinking	teamwork
第1回調査	第1四分位範囲	25	33.5	3	12	32	22.5	66
	中央値	27	35.5	17.5	135.5	38	33	82
	第3四分位範囲	29	37.75	26.25	166	46	38	89
	合計	327	396	202	1279	331	271	677
第２回調査	第1四分位範囲	24.5	35.25	23.5	143.75	34.5	31.5	75.5
	中央値	28	36	31.5	154	39.5	36	82.5
	第3四分位範囲	29	38.75	40	182.25	48	42.5	90.25
	合計	330	433	383	1927	489	435	1003

表２　調査項目の第１回調査と第２回調査の比較

	主体的な学修態度	電子カルテの操作	社会人基礎力	action	thinking	teamwork
Z	-0.396	-1.246	-2.707	-1.895	-2.199	-1.838
有意確率(両側)	0.692	0.213	0.007	0.058	0.028	0.066

Z＝負の順位に基づく

表３　社会人基礎力とその他の調査項目との関係

	第1回調査			第2回調査		
	主体的な学修態度	電子カルテの操作	看護過程の理解	主体的な学修態度	電子カルテの操作	看護過程の理解
相関係数	0.246	0.296	.815**	0.139	0.247	.869**
有意確率(両側)	0.441	0.35	0.001	0.668	0.44	0

**. 相関係数は 1% 水準で有意 (両側)

回調査 154 であった。本調査の対象学生の看護過程演習前の社会人基礎力は先行研究よりも低値であったが，これは学年の相違を考慮する必要があり，概ね妥当な値であったと考える。

社会人基礎力は看護過程演習の前後比較において，演習後の値が有意に高くなっていた。社会人基礎力の伸長は多様な経験に影響されることから，本研究の調査期間に学生が看護過程の演習以外の日常生活経験や学習活動から影響を受けていることも考慮する必要がある。したがって，本研究結果が看護過程演習のみの効果によるものとは断定し難いところに本研究の限界がある。しかし，「社会人基礎力」の３分類レベルにおいて thinking に有意差を認めており，看護過程演習は学生にとって思考過程のトレーニングであることからから，看護過程演習が学生の社会人基礎力を伸長させた重要な要因の一つと考えることができる。また，「社会人基礎力」は「看護過程の理解」と有意な正の相関を示したことから，看護過程の理解の深化に伴い，相互作用的に社会人基礎力も伸長すると考えられる。

「社会人基礎力」と「主体的な学修態度」には相関は認められなかった。「社会人基礎力」の action には主体性も含まれるが，チームやグループ活動における主体性を指しており，「主体的な学修態度」は個人の学習活動における主体性を指していることから，用語は同じであるが活動の場面と意味合いが異なることが影響したものと推察する。

「社会人基礎力」と「電子カルテの操作」にも相関は認められなかった。グループメンバーと共に電子カルテの操作を教え合いながら，協力して演習を進める中で社会人基礎力も育まれると予想したが，学生は電子カルテの操作にあまり困難を来さず比較的早く習熟し，操作に関して協力しあって学習する機会が少なかったためと考える。

本研究の分析対象は少数であり、調査に協力した学生は特に意識の高い学生であった可能性が否定できない点が本研究の限界と考えられ、結果の一般化は難しく、今後サンプル数を増やし検討する必要がある。

本研究によって, 看護過程演習における社会人基礎力の変化を縦断的デザインによって確認することができ, 特に社会人基礎力の thinking が伸長することが明らかになった。社会人基礎力は学生のうちに身につけることにより, 学生から新人看護師へのトランジションをスムーズにし, 職場適応を促進する能力である。本研究においては, action と teamwork については，看護過程演習の前後で有意な変化は認めることができなかったため，今後は action と teamwork の伸長を可能とするような講義・演習を構築する必要がある。

6. 結論

看護過程の理解の深化に伴い社会人基礎力も相互作用的に伸長すると考えられ, 看護専門職としての思考のプロセスを看護基礎教育においてトレーニングする看護過程演習は，社会人基礎力の thinking の伸長に寄与することが可能である。

謝辞

本研究にご協力くださった学生の皆様に感謝申し上げます。

本研究は平成 29 年度奈良学園大学保健医療学部共同研究費の助成を受けて実施した。

本研究の一部を第 28 回医学看護学教育学会学術学会において発表した。

〈利益相反について〉

本研究において開示すべき利益相反はない。

（2019.1.29- 投稿，2019.2.18- 受理）

文　　献

1) 経済産業省 ：社会人基礎力に関する研究会中間とりまとめ. http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/chukanhon.pdf 最終アクセス日 : 2018 年 10 月 20 日)

2) 福谷洋子, 大草智子. 看護師としての成長を支援する社会人基礎力評価を導入した新人教育. 看護展望 39 (4), 349-356, 2014.

3) 北島洋子, 細田泰子 ・ 他. 看護系大学生の社会人基礎力の構成要素と属性による相違の検討. 大阪府立大学看護学部紀要 17(1), 13-23, 2011.

4) Marukami, T,. Tani, S., et al. A Basic Study on Application of Voice Recognition Input to an Electronic Nursing Record System -Evaluation of the Function as an Input Interface-. Journal of Medical Systems 36(3) : 1053-1058, 2012.

5) 畑野快. 授業プロセス・パフォーマンスの提唱及びその測定尺度の作成. 京都大学高等教育研究 17, 27-36, 2011.

6) 北島洋子, 細田泰子 ・ 他. 看護系大学生の社会人基礎力と看護実践力および日常生活経験の関係. 日本看護学教育学会誌 22(1), 1-12, 2012.

Changes in fundamental competencies for working persons and the learning effect when using practice electronic nursing record systems in nursing process training

Yoko KITAJIMA* Terutaka MRUKAMI**
Yumiko SEYAMA*** Nariko CYUMAN*

*Faculty of Health Sciences, Naragakuen University. (3-15-1 Tomigaoka, Nara City, Nara Prefecture, 631-8524, JAPAN)
** Wayo Women's University. (2-3-1, Kokufudai, Ichikawa-shi, Chiba, 272-8533, JAPAN)
***Takarazuka University. (1-13-16, Shibata, Kitaku, Osaka-shi, Osaka, 530-0012, JAPAN)

Abstract

[Objective] This study examines the influence of changes in students' fundamental competencies for working persons and the use of group work, as well as the learning effect of nursing processes in relation to nursing process training using practice electronic nursing record systems.

[Method] Target group: A total of 79 nursing students taking second-year university subjects on nursing process training. Survey method: Anonymous self-administered questionnaire. The survey was carried out after information was gathered on nursing processes and at the end of all lectures, a total of 15 nursing process training lectures. Survey content: 36 items to measure fundamental competencies for working persons, 9 items using a 5-point scale to measure proactive learning behavior, 10 items (developed by the author) on understanding of electronic nursing record system operation, and 24 items (developed by the author) on understanding of nursing processes. Analysis method: Descriptive statistics, significance tests, and correlation coefficients were calculated using SPSS Ver. 25 for Windows.

[Ethical considerations] At the first nursing process training lecture, participants were explained the study objectives and procedures, and they voluntarily agreed to cooperate. Participants received written and verbal explanation regarding protection of their personal information, and consent to participate in the study was deemed to have been obtained after the questionnaire was returned. Regarding the implementation of the survey, approval was obtained from the ethical review committee of the affiliated university.

[Results] For the first survey, 25 responses were received with a response rate of 30.8%, and for the second survey, 20 responses were received with a response rate of 24.7%. Of these, 12 responses, whereby the comparison between the first and second surveys was possible, were included in the final analysis. A significant difference was obtained between the first and second surveys for fundamental competencies for working persons. Moreover, there was a significant positive correlation between fundamental competencies for working persons and understanding of nursing processes.

[Discussion] Through a comparison of students' skill level before and after nursing process training, it was found that such training can improve fundamental competencies for working persons. Moreover, it can be assumed that improving these skills can enhance understanding of nursing processes.

Key Word : Fundamental competencies for working persons, Nursing process training, Electronic nursing record system for trainee